

割付用紙（2 段組用）

別紙 4-2

倫 理 学

1. 沿革

昭和 62（1987）年、初代の高橋勝助教授の後任として森下直貴が着任し、平成 14 年に教授に昇任し、現在に至っている。スタッフは森下一人である。この間、大学院生と研究生それぞれ二名を指導している。

2. 研究

森下の研究テーマは四つある。(1) 倫理学の理論的研究：倫理や道徳の捉え方がこれまで狭すぎたという反省に立ち、「システムの再帰的構造化」の視点から、個人の生き方や人間関係だけでなく、組織や社会全体をも倫理学の対象とする理論の彫琢に努めている。(2) 日本思想史とくに近代日本思想史の研究：明治期の哲学者井上哲次郎を中心にして「日本哲学」の形成と展開を跡づけ、今日の思想学に及ぶ。(3) 医学哲学と生命倫理の研究：健康／病気や、科学技術倫理・医療倫理・研究倫理を論じるだけでなく、それらを議論するためのプラットフォームの形成をも考察する。(4) 未来社会の構想研究：以上の三研究をふまえて来るべき高齢社会の在り方を論じ、高齢世代が現役世代や年少世代を補助的に支えるような「老成社会」を提唱する。

2.1 研究業績 平成 15（2003）年以降に発表された主要著書を列挙する。『健康への欲望と〈安らぎ〉— ウェルビカミングの哲学』（青木書店、2003；平成 17 年に日本医学哲学・医療倫理学会の学会賞を授賞）、『水子—〈中絶〉をめぐる日本文化の底流』（共訳、青木書店、2006）、『生命倫理百科事典』（丸善、編集委員、2006）、『東アジアの死生学へ』（共著、三元社、2009）、『21 世紀への透視図』（共著、青木書店、2009）、『〈昭和思想〉新論』（共著、文理閣、2009）、『増補新版 生命倫理事典』（共編、太陽出版、2010）、『医学生のための生命倫理』（共著、丸善、2012）、『生命倫理の基本概念』（共著、丸善、2012）、『生命倫理学の構図』（編著、丸善、2012）。なお、

2.2 科研費 研究代表者の分だけ列挙する。(1) 生命操作時代における「責任意識」と「規範形成」の感情論的基礎づけ（平成 18 年度～20 年度基礎研究（C））：社会の〈倫理的ネットワーク〉の構築をめざし、「コンセンサスからコンセンサスへ」という方向で「公共倫理学」の基礎づけに取り組んだ。その間、スウェーデン（招聘教授）と米国（訪問研究者）で在外研究を行った。(2) 先端科学技術の「倫理」の総合的枠組みの構築と現場・制度への展開（平成 22 年度～25 年度基盤研究（B））：

「先端科学技術」の「デジタル化とその応用」に焦点を合わせ、哲学的視点と文明論的視点から「総合的な倫理的枠組み」を構築し、現場と制度への応用を探った。この共同研究の成果を 26 年度中に著書にまとめる予定である。(3) 明治期「日本哲学」の可能性をめぐる研究（平成 24 年度～26 年度挑戦的萌芽研究）：「日本哲学」の第二世代である井上哲次郎を中軸にして、欧米思想と伝統思想との衝突の中での自己変容の過程を跡づけ、西周の第一世代と西田幾多郎の第三世代とをつなぐ研究をしている。26 年度に中国の北京で日中の共同シンポジウムを開催する予定である。

3. 教育と社会活動

3.1 担当授業 この 10 年間でカリキュラムが変更されているため、最近の科目名を挙げる。1～2 年次生対象の「倫理学の基礎」「科学技術と文明」「社会哲学の基礎」の講義と「人間科学ゼミナールⅠ及びⅡ」を担当するとともに、全学的な「医学概論Ⅰ（医学科）・医療概論（看護学科）」の責任者をしている。4 年次生の「医学概論Ⅲ」でも同様である。その他、「医療倫理学」「研究倫理」（博士課程）、「看護倫理」（修士課程）、「生殖生命倫理」（助産コース）を担当している。

3.2 社会活動 主要なものを挙げる。地域では、静岡県がんセンター探索研究倫理委員会委員（継続中）、浜松市社会福祉事業団倫理委員会委員（継続中）、浜松市西部医療センター倫理委員会委員（～2012）など、また全国では、文科省教科用図書検定調査臨時委員（継続中）、日本学術振興会特別研究員等特別審査会委員（継続中）など。その他、関係学会の評議員や、中部生命倫理研究会の会長（2014～）であり、医療倫理・研究倫理関連の講演も度々行なっている。

（森下直貴記）



佐藤清昭・佐藤弘明両名誉教授と。右端が筆者
（2013 年 3 月撮影）